

『信じることから始めよう』 ヨハネ10:31-42

10:31 そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、また石を取りあげた。

10:32 するとイエスは彼らに答えられた、「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。

10:33 ユダヤ人たちは答えた、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としているからである」。

10:34 イエスは彼らに答えられた、「あなたがたの律法に、『わたしは言う、あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。

10:35 神の言を託された人々が、神々といわれておるとすれば、（そして聖書の言は、すたることがあり得ない）

10:36 父が聖別して、世につかわされた者が、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『あなたは神を汚す者だ』と言うのか。

10:37 もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。

10:38 しかし、もし行っているなら、たとえわたしを信じなくても、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。

10:39 そこで、彼らはまたイエスを捕えようとしたが、イエスは彼らの手をのがれて、去って行かれた。

10:40 さて、イエスはまたヨルダンの向こう岸、すなわち、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行き、そこに滞在しておられた。

10:41 多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」。

10:42 そして、そこで多くの者がイエスを信じた。

●序論

将棋界のレジェンド加藤一二三。彼の記事で、こんな風に祈っているとありました。

私は「将棋に勝たせてください」と祈ったことはありません。ただ「良い将棋をさせますように」と祈ります。もちろん祈ったからと言って必ず良い将棋が指せるとは限りません。しかしそうした負ける経験にも（神さまの）意味があることを覚えています。

相手がいる将棋と勝負の世界で、そのすべてを覆うはるかにまさった知恵ある神さまを見上げて将棋を指す棋士がいたのです。その勝負の基盤だけではわからない神様の御手の世界がそこにあったんですね。

だから、「どんなときでも柔和さを失ってはいけません」と言えるのでしょう。なぜこの人のことを今日取り上げたかということ、これまでもずっとイエスさまを非難する人たち、信じない人たちを前にして、また命の危険に及び敵意を向けられてもなお、イエスさまの落ち着きと柔和さをここで見て取れるように感じたからです。

イエスさまが語れば、みわざをなせば、人は自動的に皆、信じて従って来る…というの

ではなく、拒まれ、退けられるありさまさえはっきりそこにはありました。そんな中でイエスさまは、そのお姿を通してその人々にこう語ります。

「…わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。(：38)

今日改めて、人生では負けに見えることもあるかもしれない、けれども、そこにはイエスさまが共にある、だから「信じることから始めましょう」とお話したいのです。

## ●本論

### I. イエスを拒む人たちの理屈

10:30「…わたしと父とは一つである」。

この言葉を聞いて、ユダヤ人たちは憤慨して石をとりイエスさまを石打ちにしよう、としました。イエスさまは彼らに、御自分のわざを示して問いかけます。

:32 …「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。

彼らの答えははっきりしていました。

:33 ユダヤ人たちは答えた、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としているからである」。

ユダヤ人たちが、イエスさまに向けて石を投げつけようとした理由は、人を神格化する神の冒瀆と思ったことです。けれども、これは大きな誤解でした。

イエスさまは、人なのに神のようにふるまう方ではなく、神であるのに人になられたお方だったからです。この違いは重要です。それが2番目のことにつながります。

### II. イエスが語る証し

ここでイエスさまが引用されたのは、詩篇82篇6節の言葉でした。

その詩篇で「神々」と呼ばれる人として、裁判官や権力者たちのことを読んでいました。しかし、そこに現れる人たちは、弱い人たち貧しい人たち苦しみ人たちに対して十分なことをしなかった、そんな様子が描かれていました。

それにまさって、ここに神から遣わされた祝福をもたらず、神さまからの者がいるということが、イエスさまの主張であり、御自身の証言です。

イエスさまはそのご自身のなさっているみわざを父なる神さまからのもの、父なる神さまの思いと御業に一致していると表して、人々にご自身を証言されたのです。

10:32 するとイエスは彼らに答えられた、「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。

そしてこうも言われました。

10:37 もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。

10:38 しかし、もし行っているなら、たとえわたしを信じなくても、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におる

ことを知って悟るであろう」。

イエスさまが、目の前にいるユダヤ人たちを丁寧に諭している様子がわかります。

その怒りや誤解に囚われないで、よく見てごらん。この数々のわざ見て、言葉を聞いて、聖書に照らして、よく考えてごらんなさい。まずその業を謙虚に受け止め、信じなさい。そうしていけば、父なる神御自身とイエスさまとの関係が誤解なく見えて来るでしょう。…

とても丁寧な、人々への諭しの言葉だと思います。そこに誤解と敵意を向けられてもなお、柔和に、彼らの誤解を解こうとするイエスさまの言葉です。

### Ⅲ. イエスにキリストを見る人たち

イエスを信じる人たちが起こった様子を、あのヨルダンの向こう岸に描いています。

10:40 さて、イエスはまたヨルダンの向こう岸、すなわち、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行き、そこに滞在しておられた。

彼らは、イエスさまの言葉に、そしてなされる御業に、すなおに感動することのできる人たちであったということです。

彼らは何よりも感動をもって分かった！と言えたことがあります。

10:41 多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」。

10:42 そして、そこで多くの者がイエスを信じた。

現代に生きるわたしたちもまた、この人々のようなすなおに見る目、聞く耳、そして感動する心を大切にできたら・・・と思わされます。

先の、エルサレムのユダヤ人たちは、自分たちが求め握りしめるキリストのイメージからイエスさまを押し量り、イエス御自身を拒絶しました。

心がかたくなになっていたと言えればわかりやすいですが、もしかしたら私たちにもそういうところがないか…、気づきが促されます。

わたしはこう祈り、わたしはこれだけのことをしたのに、あの人はそれに応えない。状況は変化しない。神さまは何もしてくれない…という、不満を募らせることが、もしかしたら祈れば祈るほど…内に蓄積することがあるのも、人の姿です。

今年「御言葉を経験する」という標語を掲げていますが、御言葉に聴き従っていれば、すべてうまくいく。自分の思い通りになるという経験ばかりではありません。

思い通りになっている時だけでなく、そうならない時の中にもイエスさまはともにいてくださることを「経験する」気づきこそが大切なのです。

いわゆる勝ちか、負けか…、わたしたちは、いわゆる勝敗で人生に意味づけをします。

しかし、もしかしたら神さまは、わたしたちの知らない、気づかないでいるもう一つの道と経験を用意してくださっているのではないか、そういう経験を迎える心の柔和さ、隙間を用意しておくことが、わたしたちの信仰生活には大切なことなのです。

あのペテロも、使徒たちも、そしてパウロも、行く道を閉ざされる、挫折を経験をしました。しかし、そこに神さま経験が備えられ、出会いがあり、救われる人が起こされる

経験さえしていくのです。

だから知るべきは、あのヨルダンの向こう岸で、感動をもって人々が告白したあの言葉です。「この方について聞いてきたことは、皆本当だった」というすなおな感動を表現できる者でありたいと心から願います。

#### ●さいごに

ヨハネは、イエスさまが十字架上で殺されるその道のありさまに、人々がイエスさまを拒絶したという事実があったことを記しています。

以前に塩狩峠で、雪の路地での路傍伝道で出会った伝道者から、キリストを十字架につけたのが、自分だと指摘されたとき、彼はそれを受け入れることができずに葛藤したのです。

ある意味、それは、彼がイエス・キリストを巡って、あの伝道者の口から聞いたかった言葉ではありませんでした。

むしろ、お前はよくやっている、お前の正しさは、神の子となるにふさわしいものだと評価されることではなかったでしょうか。

ある意味で、あの正しさを誇ってきたユダヤ人たちが、イエスさまに「しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。」(9:41)と言われたときのようないい思いだったでしょう。

はたしてわたしたちはどうでしょう。

もしすなおに自分を見つめなおし、そういう思いと不満をわたしたちも、少なからず持っていることがわかるなら、あのイエスさまの十字架は、そういうわたしの罪のためであったとわかるのです。

聖書は、皆さんを責め立てようとしているわけではありません。わたしたちに幸いない気づきをくださる、この人々の聖書的体験を通して、自分自身を点検し、キリストの十字架こそがわたしを罪と滅びから救う救いとなるとわかるのです。

そうして、わたしたちもあの人たちと一緒に感動をもって叫ぶことができます。

10:41-42 多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」。 10:42 そして、そこで多くの者がイエスを信じた。

「ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」と。感動をもってこの救いを受け取る者でありたいと願います。